

《翻訳》

喜劇 墨塗

—F. A. ユンカー・フォン・ランゲッグによる狂言『墨塗』独訳—

F. A. ユンカー・フォン・ランゲッグ 独訳

渡 辺 徳 夫 和訳

喜 劇

いつわりの涙

(^{すみぬり}墨塗 = 顔に墨を塗ること)

人物

地方出身の侍 (封建領主)

太郎冠者^{たろうかじや}, その従者

京都の芸者 (公に認められた歌姫)

舞台

京都。「大名の別宅」, 「芸者宅へ向かう道の上」, そして「芸者宅の前」
とが交互に変わると想定されたし。

大名 (自分の別宅にて独白) : 訴訟のためわたしは長い間、遠路はるばるこの
京の都に呼び出されていたが、争いもようやく有利に片がつき、わが土地
も元通り帰ってくることとあいなった。さて、従者の太郎冠者を呼び出そ
うと思う。きっと、あの男も喜んでくれるはずだ。おい、おい、太郎冠者、
太郎冠者。

太郎 (舞台の背後で) : はっ、旦那様。

大名 : おるか。

太郎 : はっ、こちらにおります。

大名 : 早う来い。急げ。

太郎 (この国の習慣に従って主人に挨拶をし、跪きながら畏まる。やがて対話中に許
しを得て立ち上がる) : 旦那様、今日はことのほかご機嫌がよろしゅうござい
ますね。

大名：そうか、わかるか。そのわけをこれからそなたに話そうと思っていたところだ。実は、そなたも知っての通り、訴訟があつて長らく、郷里から離れたこの京の都に呼び出されていたが、こちらが十二分に満足する形で決着がつき、そのうえ新たな土地まで与えられた。それで、祝福の言葉をかけてほしいと思つて、そなたを呼び出したのだ。

太郎：それは、それは、旦那様、心よりお祝い申し上げます。お裁きが有利のうちに片が付き、その上さらに新しい土地を得られましたとのこと、祝着至極に存じます。

大名：ふむ、こちらにはもう用がなくなつた。これですぐにでも国元に帰れる。これに勝る喜びは無かるう。

太郎：それに勝る喜びはございません。望外の喜びでございます。一番下の者に至るまで里にいる者皆、その知らせをどんなに首を長くして待っていたことでしょう。しかも万事、旦那様のお望み通り、決着がついたとは、誠にもつておめでたいことでございます。

大名：ふむ、それで、すぐにでも帰途につきたいのだが、ああそうだ、出立する前に挨拶をしておくことはないかな。わたしが別れを告げるのがよいと思われる、そういう人がおるのではないか。

太郎：はて、存じません。旦那様が何はさておき別れを告げねばならぬような方、でございますか。一向に思ひつきません。それより、なるべく早くわたしたちを国元へ帰して下さいませ。嬉しくて気持ちは早、わが家に行つております。切にお願い申し上げます。

主人：ほら、ほら、別れを告げなければならぬような、どこかの誰かがきつとおるはずであらう。そなたに心当たりはないか。

太郎：どなたも思い浮かびません。

主人：ほら、例の、そなたも知っている、あの芸者、あの人に別れの挨拶をするのは、礼に適つていると思うが、どうであらうか。何しろあの女のお陰で長らく楽しい時を過ごすことができたのだからな。

太郎：暇乞いをせずに、黙つて出立するのが、ようございましょう。

主人：いや、しかし、そのようにさっさと出ていけば、礼儀作法や細かいしきたりを鼻にかける京の連中は、「人の優しい心根に感謝の気持ちすら示さぬ、地方の田舎侍めが」などと口さがなく言うことであらう。人の口には戸は立てられぬ。それゆゑ、あちらにこちらが京を離れることを知ら

せ、別れを切り出さなければなるまい。なんとも気が進まぬことだが。今から呼んできてくれぬか。あの人を。

太郎：かしこまりました。すぐに呼んで参りましょう。

主人：それで向こうへ行ったら、あちらにこう言うのだぞ。「ここしばらく疎遠になっておりましたが、それはうちの旦那様が、決してあなたを避けているわけではありません、それで、旦那様があなたにお伝えしなければならぬことがあるようなので、ぜひお越しいただきたい」とな。そなた一人で行って、あの女をここへ連れて来るのだ。いいな、急げ。

太郎：かしこまりました。

主人：そして、われらが国元に帰ることを知れば、さぞかし悲しんで泣くであろうから、それについては一言も言うな。わかったな。

太郎：はい、口にいたしません。

主人：さあ、急いでゆけ。ここでそなたたちを待つ。(退場。すなわち、太鼓座の横の舞台後方に腰を下ろす)

太郎：(舞台の上を廻って、使者の道行を示す) ああ、よかった、やっと家に戻れる。本当によかった。おのずと足の運びも速くなる。それにしても京都暮らしは、途方もなく長かったな。その間ずっと国元に帰りたいと一日も忘れず思い焦がれていたが、今この瞬間にも、帰郷を待ちきれない思いだ。お裁きが首尾よく終わったことについては、わたしの方から口にするつもりはないけれども、旦那様が新しい領地を獲得なされたとは、本当によかった。旦那様はきっとわたしに分け与えてくださるはずだ。そのことも考えると、嬉しい気持ちをどうにも抑えられない¹⁾。(芸者宅の前で) ああ、ここだな。こんにちは、ごめん下さい。

芸者(家の中で)：おや、誰かしら、表に聞き覚えのある声。どちらさまですか。

太郎：わたしです。

芸者(出て来て、型通りの挨拶をして)：おや、何と、太郎冠者殿ではないですか。ずいぶんご無沙汰でしたね。本当に、どうしたの。でも、嬉しいわ。急に姿を見せるなんて、いったいどういう風の吹き回しなのかしら。

太郎：実は、今日は旦那様のお使いで参りました。あなたをここしばらくお招きできなかったことにつきまして、心よりお詫びをしたいと仰せにございます。旦那様はやんごとなき用が重なり、それができずにおりました。ついては、誠にご足労ですが、どうか旦那様のところへお越しくださいませ

すようお願いいたします。あなた様をすぐにお連れするようにとわたしは仰せつかっているのです。

芸者（傍白）：もうずっとずっと、あの方のところを訪ねたいと心ひそかに願っていた。いまこの時、太郎冠者を使い差し向けるなんて、なんとよい頃合いでしょう。（大声で）嬉しいわ。さあ、早速出かけましょう。

太郎：承知しました。参りましょう。

芸者：お供をしてくださるわね。

太郎：もちろんですとも。光栄でございます。

芸者（道の上で）：ねえ、太郎冠者殿、はっきり言って、そなたは地方の人にしてはあか抜けしているし、それに常によくしてくれたわね。こちらが戸惑ってしまうほど。

太郎：いや、あなたの方こそ、わたしのような荒くれものにも寛大に接してくださり、恭悦至極に存じます。（主人の宅の前で）さあ、あなたのご到着をお伝えしましょう。こちらで少しお待ちを。

芸者：はい。

太郎（玄関先で）：ごめん下さい、旦那様。

主人：おお、太郎冠者だな。帰ってきたようだ。

太郎：旦那様、旦那様。

主人：戻ったか。

太郎：戻りました。

主人：さあ、さあ、入れ、そなたを待っていた。

（主人宅で）

太郎：（先の通り挨拶をする）

主人：よう戻った。

太郎：ただいま帰りました。

主人：それで、呼んできたか。あの人を。

太郎：もちろんでございます。お供をしてお連れしました。

主人：では、こちらにお通しして。腰かけ²⁾の用意を。

太郎：はっ、こちらに。（娘に向かって）入るようにと仰せです。

芸者：わかりました。（中に入って、挨拶をする）

太郎：よく来てくれた。変わりはないか。

芸者：（膨れっ面をして）よくもよくも長いことほったらかしにして、わた

くしのことなどとうにお忘れになったのかと思っておりました。何ゆえ今日になって急にわたくしのことを思い出したのでしょうか。そのわけをぜひお聞かせ願いたいものだわ。

主人：いたく気分を害されたのは、もっともではあるが、何も意図してそのような不愛想を働いたわけではないのだよ。このところ、やんごとない用が重なって、それでほんの少しの時間すら取れなかったのだ。決して嘘ではない。この太郎冠者が証人だ。いや、そなたのところへしばらく顔を出さずにいたことは、確かに悪かった。この通りお詫びする。どうか許してくれ。

芸者：用が重なってと言うけれども、そんなこと何の理由にもなりませんわ。本当にわたしのお付き合いを大切だとお考えなのかしら。もし大切と考えているとおっしゃるのなら、なぜわたしに連絡をしなかったのです。知らせることなど、簡単じゃありませんか。こんなふうには邪険に扱われるとは、思ってもおりませんでしたわ。

主人：「大切にしているのか」とか「邪険に扱われる」とか、何ということを使うのだ。そんな棘のある言葉を投げつけるのはやめておくれ、少し言葉が過ぎるのではないか。今日そなたに足を運んでもらったのは、そのわけであるが、それについては、太郎冠者から説明がある。

太郎：ちょっと待ってください、何ゆえわたしなのですか。それはどうか旦那様ご自身の口から説明してください。

芸者：え、何なの、いったい、回りくどいことはやめてちょうだい。

主人：いや、別にたいしたことはないのだ。今日そなたに来てもらったのは、京の滞在を余儀なくされた用件が思いがけなく片が付く、それで、国元から離れて京にとどまる必要はなくなり、それゆえ、そなたにお別れのご挨拶をしようと思って来てもらった、というわけなのだ。

芸者：ええ、という、まさか、このわたしをここに置いて、立ち去るつもりではないでしょうね。それはまことの話なのですか。

主人：本当のことだ。

芸者：ああ、悲しや、悲しや、それがまことの話とは。なぜそのことを言ってくれなかったのです、ただの一言の相談もなかったではありませんか。いつかあなたから見捨てられる日が来るのではあるまいかと、このところずっと不安に思っていたけれども、まさか本当にそれが的中するとは。は

じめからいずれはここから立ち去るおつもりだったのでしょうか。それを言わずにおいて、そして直前になって突然何の前触れもなく別れを告げるなんて。いっそのこと、わたしの目の前で飛び立つ鳥のように、黙って立ち去ってしまえばいいんだわ。ずいぶん身勝手な人ね。

主人：いや、いや、ほどなく国元に帰るということをそなたにもう少し早く打ち明けようと思っていた、それは、確かなのだ。でも、そなたにつらい思いをさせてはいけないという気持ちから、なかなかそれを言えずにいたのだ。でも、この先わたしが国に戻ったとしても、相手のことを忘れず、互いに想う気持ちさえ心があれば、悲しみも減るではないか。そしてすぐにまたこの都へ舞い戻って来よう。どうか再会の希望がそなたの心の痛みを静めてくれますように。さあ、今申したことをその胸にしまって、もうそんなに泣かないでくれ。

芸者：今さらそんなきれいな言葉を並べたところで、そんなこと誰が信じるものですか。秋の空は一夜のうちに七回変わるというので、「女ごろと秋の空」などと人はよく言うけれど、そんなものは嘘。「男ごろと秋の空」だわ。その背中をくりとこちらに向けるや、きっとわたしのことなどきれいさっぱりお忘れになるのでしょうか。もし、わたしの言うことが、違うとおっしゃるのなら、もしわたしへの想いがずっと変わらないとおっしゃるのであれば、そうね、あちらへ行ったらお便りを届けてちょうだい、わたし宛に。書状の集配が行われるたび³⁾にですよ。あなた自身のこと、あなたに関することを一部始終、お手紙にしたためて、知らせてちょうだい。それを約束して。

主人：なぜ手紙などせがむのだ。いま相手のことを忘れないと約束したばかりではないか。もちろん、そなたを国元に連れて行こうと考えてはいた。だが、考えてはみたけれども、これがなかなかうまくいかぬものなのだ。わたしの従者としてなら連れていけたかもしれんが。だが、みんながみんな、そなたが供の者とは思わぬであろう。それに、いろんな人の気持ちにも配慮せねばならぬ。そう、向こうには、その、妻もおることだし⁴⁾。そういう事情があつて、そなたを連れていくわけにはいかなかったのだ。そうだ、近いうちに実現すればよいが、ひそかに太郎冠者をそなたのところへ迎えに上がらせよう。だから、そんなに泣かずに元気を出して、その日が来るまでじっと待っていておくれ。「愛別離苦」という言い伝えがある

ではないか。残念ながら、それは真実であろう。われわれ二人の状況は今まさにそれなのだ。よく考えて見よ、昔から「この世は無常、逢うは別れの始まり」⁵⁾と言うではないか。それゆえ、心を落ち着けて、そのためにその身をゆだねるのだ。いいな、わかっておくれ。でも、実際、そなたの涙を目の当たりにすると、こちらもこの胸が締め付けられるような思いがして、今にも張り裂けそうだ、ああ何だか急に、国元に帰りたくなくなってしまったな。

芸者：今おっしゃったことはまことのお気持ちなのでしょうか。だとしたら、本当に、心から感謝せずにはいられません。わたくしなど哀れな、取るに足らぬ人間にすぎません。でも、そんなわたくしとあなたとの関係はこの世だけではなく、次の世⁶⁾でも変わりはありません。もしあなたに付き従うことをお許しいただけるのであれば、この上もなくしあわせでございます。たとえ険しい岩山であろうともはだしで越えて行きましょう、そして、どこにでもどこまでもあなたについてまいりましょう。とはいっても、やはり、わたくし、あなたのご家族のことも考えずにはいられません。そう、あなたの奥様の前では、わたしはどうにも身の置き所がございません。あなたにとってもしやこのわたしという存在がご負担になっているのではないのでしょうか。もしご負担になっているとしたら、「どこまでも」という思い、きっぱり捨て去ります。そして、「あなたについていく」ことなど、決していたしません。でも、わたしとあなたとの約束、これだけはどうかお忘れにならないでください。きっと太郎冠者を人知れず迎えに上がらせて下さい、お頼みいたしますよ。なぜって、それは、あなたとの再会を待ちわびる気持ちになりたいからではありませんか。

主人：ああ、なんと優しい、情け深いその言葉。それぞまことの京女。そなたとはほんの短い付き合いであったが、それでも別れのあと、嵐も大波もものともせず、別れた相手の後を追いかけてよという気持ちになるほど、悲しんで泣いてくれるとは。そなたのそのような思い、誠にかたじけなく思う。しかし、これから出発せねばならぬ身ゆえ、失礼することを許しておくれ。(女、元の場所に引きさがり、主人の方は出発しようとする)

太郎(傍白)：ややっ、いったいこれはどうしたことか。えらいことになっているぞ。旦那様は、本当にあの女が泣いていると思っておられるに違いない。でも、あの女、ひそかに隠し持っている水で目の周りをぬらし、嘘

泣きをしているのではないか。これは、何としても旦那様の目を覚さなければならぬぞ。(咳払いをして) えっへん、えっへん、旦那様、ちょっとお話が。
主人：どうしたのだ。

太郎：大事なお知らせが。

主人：何だ、言うてみよ。

太郎：内緒話ゆえ、どうかこちらへ。

主人：どうしたというのだ。

太郎：旦那様、ひょっとして、旦那様は、あの女が真実、まことの涙を流していると思っておられるのでしょうか。いや、泣いてはおりません、断じて。あの女、嘘泣きをしております。

主人：何をたわけたことを。よくもそんな心無いことを言えるものだな。じゃ何か、人は泣く時に「目から流れ出るまことの涙」以外に「外から流れて来るいつわりの涙」の二種類の涙を流すとお前は言うのか。

太郎：実を申しますと、わたしもあれが、真実、まことの涙だと信じておりました。はじめは旦那様同様、すっかり騙され、本物の涙を流して泣いていると思っていたのです。しかし、さにあらず。あの女は水を手元に隠し持ち、さも涙を流しているかのように見せかけるため、こともあろうに水で目を濡らし、嘘泣きをしているのです。お願いでございます、今しばらくそのままここにいてください。

主人：おのれ太郎冠者、憎い奴め、まことの、情け深い、別れゆえのあの女の涙、どこに偽りなどあろう。これから国元に帰るゆえ、どうせ、そなたの奥方の気嫌を取ろうと、都のおもしろばなしなどと言って、そのような心無い作りばなしをこしらえるつもりなのであろう。おおかたそうに違いあるまい。(太郎冠者から離れる)

太郎：ああ、これほどはっきりしているのに、どうしてうちの旦那様は、気づかないのかな。でも、どうにも旦那様にはわかってもらえそうもない。まずいな。このままだと、うちの旦那様、あの女にいろんな約束とか贈り物をしてしまうぞ。何とかせねば。何とか。しかし、あの水の入った茶碗のことをばらすにはどうしたらよいのだろう。(思案する) そうだ、思いついたぞ、いい考えがある。これならきつといける、よし。(退場。すなわち、この後すぐ三人とも戻る)

芸者：ねえ、まだどこに行くつもりなの、一緒に過ごす楽しみの時間はも

うわずかしかないのですから、ほかのことなどみんなうっちゃって、今はわたしのお相手だけしてればいいでしょう。

主人：もちろん、今のわたしにとってそなたとおしゃべりする以上に気がまぎれることはないのだが、あの太郎冠者の奴めが、どうしても話があるというので、あの男のところに、ちょっとばかり。そなたの別れゆえの嘆きは、もっともなことではあるけども、でも、訴訟が思い通りにあいなったことをわたしとともに喜んでくれ。さあ、涙をぬぐって、旅立つわたしにお祝いの言葉をかけておくれ。

芸者：もちろん、この都でのあなたのご成功、わたくし、心より喜んでおりますけれども、この無常の世の中、すべては不確かなものにすぎませぬ。わたしたちが再び会えるかどうかなど、確実にわかるわけではございません。それゆえ、このつらい、悲しい気持ち、いまあなたもわたしといっしょに分かち合っていたいただきたいのです。そして、少なくとも優しい言葉をわたしの方こそ二言三言かけてほしいのです。(しきりに泣く。そして水と思つて墨を顔に塗る)

主人(女の顔を見て、仰天する。傍白)：何と、これはどうしたことか、顔が真っ黒になっている。おかしいことかな。

おい、おい、太郎冠者、こちらへ来てみよ。

太郎：どうかなさいましたか、旦那様。

主人：ほら、あれを見てみよ、いったいどうしたのだ。あの女の顔。

太郎：やっとなづかれましたか。

主人：気づくも気づかないも、何ゆえあの女の顔が真っ黒になっているのだ。

太郎：それはですね、さきほどあの女が水を目につけ、嘘泣きをしているとわたくし、申しましたでしょう。でも、旦那様には一向に相手にしてただけませんでしたので、一計を案じ、すきを見て、あの女が袖の下に隠し持っていた茶碗の水を墨に取り換えておいたのでございます。それにしても、とんでもない京女だな、まったく。

主人：そうか、そうだったのか、でかしたぞ、太郎冠者。あの女、自分がいまだどんな顔になっているかわからんだろうな。

太郎：ええ、水が墨とすり替わったことすらまったく気づいていないでしょう。

主人：あの猫かぶりめが。それをあいつに気づかせるにはどうしたらよいかな。何とか恥をかかせたいものだが、何かよい手立てはないか。

太郎：はて、どうしたらよいのやら。

主人：そうだ、妙案を思いついたぞ。あの女に形見だと言って小さな手鏡を贈ってやろう。それで、あいつがその鏡をのぞき込めば、なあ、どうだ、太郎冠者。

太郎：一段とようございます。

主人：さあ、早速取り掛かるとしよう。そなたは隣の部屋へ入って、控えておれ。ころ合いを見て、そなたを呼び出すから、そうしたら、この手鏡をあの女に渡すのだ。いいな。

太郎：かしこまりました。(退場)

芸者：ねえったら、またどこへ行くの。

主人：いや、すまない。また構ってくれないと言われるかもしれぬが、出立を前にして伝えなければならぬことがいくつかあってな。

芸者：そんな用事なんてどうでもいいでしょう。一緒にいられるのはあとほんのわずかなのですから、ほかのことなどみんなうっちゃって、わたしだけを構ってくればいいのです。そばを離れないで、ずっとここにいてくださいね。

主人：聞き分けのないことを言わないでおくれ。昔から「別々の木の枝は梢になって結びあう」⁷⁾という言い伝えがあるではないか。われわれ二人もその枝のようにいつの日か互いに一つになるであろうよ。それまでじっと待っていておくれ。

芸者：このつらい心を慰めようとする、その優しいお言葉、痛み入ります。本当にありがとうございます。どうか太郎冠者には近々迎えに来るように言ってくださいね、それだけをお願いいたしますよ。

主人(呼ぶ)：太郎冠者、おい、太郎冠者、こちらへ。例のものを。

太郎：はい、ただいま。(芸者に向かって)これは手鏡でございます。旦那様ご愛用のもので、「どうかこれを形見として受け取っていただき、それがしのことを思い出すたびに手に取って見つめてほしい」と旦那様が仰せにございます。

芸者：まあ、形見に手鏡を。このわたしに。—いや、これを見れば、どうしても二人の別れを思い出すだけですものね、これは、わたしには絶えず

悲しみの涙が湧き出る泉のようなものだわ。でも、旦那様、このお心遣い、わたくし、決して忘れません。逢いたくてたまらなくなったら、そのたびに、そのつど、この鏡を見つめ、この悲しい心を癒すことにいたします。こうやって見ることで一ひゃあ、顔がまっ黒になっている。誰かしら。あつ、よくも、よくもやってくれたわね、こんな汚れのない乙女を黒く汚す⁸⁾とは、何と悪意のある意地悪、何と悪質ないたずら。断じて許しませぬ。(怒り心頭して、太郎冠者に向かって襲いかかる)

太郎：いや、いや、わたしではありません。わたしではありませんってば。旦那様です。

芸者：え、これ、あの人の仕業なの。よくもよくも人に恥をかかせてくれたわね。ちょっと待った、そこの二人。そなたたちの顔にも墨を塗ってやるわ。こら、待ちなさい。(舞台を廻って、二人を追いかける)

主人：ことの次第はまったくわからぬが、許しておくれ。出立の刻限だ、さあ、国元へ帰るぞ、急げ、太郎冠者。

芸者：こんな汚れのない乙女を黒く汚すとは。何と、憎い男ども。そこの二人、逃げるつもりか。そうはさせぬわ。待てというのに。誰か、あの二人をとらえてくだされ、つかまえてくだされ。すみませんでは、わたしの気持ちが悪くもなされぬ。この代償はきつときつと払ってもらいますから。

主人：どうか許してくれ。では、達者で暮らせ、さらば、さらば。

太郎：どうかお許しください。墨を塗られるのは、ご勘弁。では、お暇します、さようなら、お元気で。

(女は何度も舞台を廻って二人を追いかけ、そのあと、三人全員橋掛かりを通して退場。)

終

ロンドンにて

F. A. ユンカー・フォン・ランゲツグ

原註

- 1) 太郎冠者はいまや彼の主人から陪臣の領地として土地を得ることを希望している。
- 2) 中世の時代に將軍の封建君主が使っていた折りたたみ式の腰掛け。

- 3) 郵便物は最近まで、運送の手段や速度の点で劣る疾走する使者、飛脚によって運ばれていた。
- 4) 側妻は、この国の風習に反してはいないが、やはりそのような女性は正妻の承諾がなければ、家に迎え入れることができないと思われる。
- 5) この箇所は、結ばれることの成就についての仏教の教えを引き合いに出している。輪廻の教義に従えば、その結びつきは、この生（世）のみならず、将来のいかなる生まれ変わりにおいても約束されている。
- 6) 中国の自然哲学思想に従えば、世界（現世）は、水の中の魚、卵の中の黄身のように、取り囲まれた気の中で不安定に泳ぎ、漂っている。
- 7) 原典では、この箇所は次のように記されている。連理の枝は、別々の木が梢のところで合体し、木目がつながる。それ故、わたしたちもその連理の枝のように、いつか再び一つに結び合うであろう、と。連理とは、伝説の木の名称。この言葉は、中国の詩に由来し、二本の枝が一体となって木目一つになっている木のことを言い表している
- 8) この語呂合わせは、原典のそれに合わせている。

テキスト

F. A. Junker von Langegg: Alte japanische Dramen. II. in: Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes. 53. Jahrganges Nr. 24. Leipzig, 1984. S. 378-380. および, Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes. 53. Jahrganges Nr. 25. Leipzig, 1984. S. 397-399.

URL: https://books.google.co.jp/books?id=IHwDAAAAYAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (参照日: 2020年11月28日)

本稿は1984年6月にDas Magazin für die Literatur des In- und Auslandes. 53. Jahrganges Nr. 24-25に掲載されたAlte japanische Dramen. II.の中のfalsche Thränen. (Sumi-nuri=Tintenflecken.)を翻訳したものである。IIとなっているのは、同雑誌の1984年4月のNr. 15-16に、Drei Tonsuren (Roku-nin-so)を載せているからである。この『六人僧』の翻訳については、渡辺徳夫「喜劇六人僧。F. A. ユンカー・フォン・ランゲグによる狂言『六人僧』独訳の翻訳」を参照。『リユンコイス第52号』2019年。